

平成 3 0 年度第 1 回
松本市・山形村・朝日村中学校組合
総合教育会議議事録

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

平成30年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議議事録

平成30年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議が平成30年12月25日午後3時松本市役所第一応接室に招集された。

議 事 日 程

1 開会

2 あいさつ

3 自己紹介

4 懇談項目

発達障害への支援について

問題提起

「思春期の発達を支えるための学校と家庭の連携」

講師 本田 秀夫 先生

信州大学医学部子どもこころの発達医学教室教授

兼 信州大学医学部附属病院子どもこころ診療部部长

意見交換

5 閉会

出席者名簿

【会議構成員】

管理者（松本市長）	菅 谷 昭 君
教育長（松本市教育長）	赤 羽 郁 夫 君
教育長職務代理人（山形村教育長）	根 橋 範 男 君
教育委員（朝日村教育長）	二 茅 芳 郎 君
教育委員（山形村教育長職務代理人）	平 林 昌 廣 君
教育委員（保護者委員）	大 森 志 保 君

【オブザーバー】

信州大学医学部子どもこころの発達医学教室教授

兼 信州大学医学部附属病院子どもこころ診療部部長

本 田 秀 夫 君

【鉢盛中学校】

学校長 藤 田 克 彦 君

【事務局職員】

事務局長	矢 久 保 学 君
事務局次長	小 林 伸 一 君
事務局次長	麻 田 仁 郎 君
事務局次長	横 田 則 雄 君
事務局次長補佐	金 井 稔 君
事務局次長補佐	田 中 智絵子 君
事務局次長補佐	河 村 知 佳 君
事務局主事	深 澤 亮 平 君
山形村教育委員会	上 條 憲 治 君

開会宣言 午後３時００分開会

平成３０年度第１回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議の開会を宣言した。

- 事務局次長（小林伸一君） それでは、定刻より若干早いですが、全員の方がおそろいでございますので、ただいまから平成30年度第１回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

議事に入りますまでの間、私、事務局次長の小林でございますが、進行を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は公開とし、お手元の次第により進行いたします。

最初に、この会議を主催いたします菅谷管理者からご挨拶をお願いいたします。

- 管理者（菅谷 昭君） 本日はお疲れさまでございます。

一言ご挨拶を申し上げます。

今年も残すところあとわずかとなりました。仕事納めを控えまして何かとお忙しい中、本日は教育長を初めとしまして教育委員の皆さんにご出席いただき、誠にありがとうございます。

また、本田先生、本日はありがとうございます。

皆様方には、本当に日頃から当中学校組合の教育行政の推進に大変なご尽力を賜っておりますことに、重ねて感謝を申し上げます。

ご案内のとおり、本会議につきましては、首長と教育委員会が相互に連携を図り、教育に関する重要な課題につきまして検討するものとして、平成27年度に改正地方教育行政法の施行に伴い設置されたものでございます。

さて、これまで国は、シルバーデモクラシーと言われる中、自治体政策も高齢者を中心とした政策が進められてまいりましたが、ようやく子供や若者の成長を支援する政策へと目が向けられるようになってまいりました。これからは、各自治体で次世代を担う子供や若者の支援を未来への投資として重点的に取り組まれていくことと思います。

そうした中、増加傾向にございます発達障害が大きな課題となっております。近年では大人の発達障害によるトラブルや社会的ひきこもりとの関連からも、医療と教育の連携、そして、首長部局と教育委員会の部局横断の連携を考えていく必要があるかと感じております。

そこで、本日は発達障害への支援を懇談項目といたしまして、信州大学医学部の本田秀夫教授をお迎えし、発達障害の子供への理解を深め、今後の支援のあり方などについて、本田先生を交えて議論を深めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

本日の会議では、皆様から忌憚のないご意見をいただけるものと期待申し上げます。本日いただきましたご意見を踏まえ、教育委員の皆様方と共通の理解や相互の連携を深め、

鉢盛中学校の教育のさらなる充実に向けて取り組んでまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

- 事務局次長（小林伸一君） ありがとうございます。

続きまして、赤羽教育長からご挨拶をお願いいたします。

- 教育長（赤羽郁夫君） それでは、第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議の開催に当たりまして、教育委員会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

先ほど菅谷管理者のご挨拶にもありましたとおり、首長と教育委員会、互いの理解と連携を深めることが本会議の大きな目的の一つでありまして、昨年は信州型コミュニティスクール鉢盛モデルについてをテーマといたしまして、学校と地域が一体となって地域づくり、学校づくりを進められる新しいコミュニティスクールの方向について大変有意義な意見交換をすることができました。

本年は、懇談のテーマを発達障害への支援についてといたしまして、アドバイザーに信州大学の本田教授をお迎えいたしました。本田先生には、発達障害の専門家として、松本市特別支援教育推進協議会の研修会でも講師をお務めいただくなど、松本市教育委員会としても大変お世話になっているところでございます。本日は、1市2村のさまざまな立場や取り組みから、日ごろの活動をもとにその取り組み、悩み等をもとに意見交換をし、本田先生のご助言もいただきながら、発達障害を抱えた子供たちへの支援をどのように進めていったらよいか、今後の取り組みにつながる懇談の場になればと思います。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

- 事務局次長（小林伸一君） ありがとうございます。

それでは、本年度第1回目の総合教育会議となりますので、改めて出席委員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと思います。

お手元の資料の1ページ、出席者名簿の順に沿って、恐れ入りますが根橋委員さんからお願いたします。

- 教育長職務代理人（根橋範男君） 山形村教育長の根橋範男と申します。よろしくお願いいたします。
- 教育委員（平林昌廣君） 山形村教育委員会の平林と申します。よろしくお願いいたします。
- 教育委員（二茅芳郎君） 朝日村教育長の二茅芳郎と申します。よろしくお願いいたします。
- 教育委員（大森志保君） 鉢盛中学校の1年1組と3年1組に子供がおります、保護者の大森志保です。よろしくお願いいたします。
- 事務局次長（小林伸一君） それではここで、本日の会議のアドバイザーとしてご出席をいただきました本田先生をご紹介します。

資料の3ページに紹介がありますので、ご覧いただきたいと思います。

本田秀夫先生は、昭和63年に東京大学医学部をご卒業後、同大学医学部附属病院の精神神経科にご勤務となりました。その後、国立精神・神経センター武蔵病院精神科、横浜市総合

リハビリテーションセンター発達支援担当部長、山梨県立こころの発達総合支援センター所長などをお務めになられ、平成26年には信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部長、診療教授になられています。そして、本年4月には子どものこころの発達医学教室教授にも就任をされております。その他にも、日本自閉症協会理事、日本自閉症スペクトラム学会準理事等をお務めになるなど、多方面でご活躍をされております。

本田先生には、大変お忙しい中お越しいただいております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

では、これより議事に入ります。

議事の進行につきましては、菅谷管理者にお願いいたします。

- 管理者（菅谷 昭君） それでは、私のほうでこの後の議事の進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。座ったままで失礼いたします。

本日の懇談項目は、先ほど申し上げましたが、発達障害の支援についてでございます。

意見交換に当たりまして、初めに本田教授から、発達障害の現状と課題並びに自治体の果たすべき役割などにつきましてお話を伺いたいと思います。

先生、よろしくお願いいたします。

- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 本田でございます。よろしくお願いいたします。

本日はこのような場にお招きいただきまして、ありがとうございます。

私のほうでは、思春期の発達を支えるための学校と家庭の連携をテーマに、30分ほどお時間をいただいております。

あらかじめお断りしておきますと、発達障害を中心に取り上げはしますけれども、思春期の問題というのは発達障害だけ考えればいいのではございませんので、全体的なメンタルヘルスの問題の中での発達障害ということでお話をさせていただきたいと思います。

私ども、子どものこころの発達医学教室という名前をつけておりますが、総じて児童精神医学というのは発達障害を主に扱う人たちと、それから、思春期のメンタルヘルスを扱う人たちというのは、かつては二分されていた時代がございます。どちらかという、発達障害をやる人たちは小さな子供さんを扱うことが多くて、思春期を扱う人たちというのは余り発達障害や知的障害には関心がなくて、どちらかというといじめや不登校の問題を主に扱ってきました。

暗黙のコンセンサスとして、不登校の子供さんの中には発達の問題がある子は余りいないという前提があった時代が長く存在します。ただ、2000年に入ってからでしょうか、発達障害の中でも知的な遅れのないタイプの発達障害が非常に多いということがわかってきてから、むしろ不登校のお子さん、それから大人になって引きこもっている方々の中に、非常に発達障害の特性を持っている人が少なからずいるんだということが指摘されるようになってきて、今では児童精神医学をやる者は、小さな子供さんの発達障害も見なければいけませんし、思春期の問題も両方扱うということが当たり前の時代に入ってきております。

そういった中で、子供さんの心の問題を大きく3つのジャンルに分けて考えることができます。1つは、脳機能の異常が何らかの形で想定される一群です。その中でも先天性の脳機能の異常が想定されるものが発達障害や知的障害ということになります。今の医学では、これを神経発達症と呼ぶことがだんだん主流になりつつあります。

それからもう一つは、これは比較的まれですけれども、交通事故等による脳の外傷によって後遺症が残るもの。これは、一般的に高次脳機能障害といいますけれども、中には高次脳機能障害を示す子供さんは稀にいらっしゃるので、最初からここに入れておきます。

それから次に、いわゆる心因性の精神的炎症です。つまり、もともとの生まれつきの問題ではなくて、生まれた後のさまざまな経験の中での、例えばつらい体験をしたり、トラウマ体験をしたり、そういったことによる炎症を想定したような概念というのが幾つかございまして、その中でも乳幼児期の親子関係、特に母子関係のゆがみによって生じる可能性があると考えられるのがアタッチメント障害、これは愛着障害というふうに言われています。

それに対して、親子関係以外でもさまざまなつらい体験をすることがございますし、今年、新しくWHOから出たICMという診断分類がありますけれども、その中で初めて取り上げられた概念としては複雑性PTSDというものがございまして、これは親御さんからの虐待ですとか、それから例えば長年にわたる友達間のいじめですとか、学校の先生たちからのパワハラ的な仕打ちです。そういったことの積み重ねが原因となって、いわゆるPTSDと同じような精神状態を呈する一群の人たちがいるということが指摘されるようになっていきます。これは、近年のいじめの問題にもかなり関係のある部分で、児童精神科医の間では注目されています。

それから、意外にこれは見落とされがちですけれども、通常は成人期に発症する精神障害が、少し早めの中学生ぐらいの年代で起こることが想定されるもので、これも代表は統合失調症になります。それ以外にも、いわゆる鬱病や双極性障害、躁鬱病と俗に言われるものですが、通常ですと青年期、成人期以降に起こる問題ですが、早いお子さんだと小学校高学年から中学生ぐらいの年代から起こることがございます。

ですので、我々は特に中学生の精神保健を考えたときに、その子供さんの生まれつき持っている発達の問題、それから、どのような育て方やどのような環境で育ってきたか、どのような経験を積んできたかという環境の問題、それから、大人になって発病する可能性のある精神障害の早期の段階を見ている可能性、この3つを常に意識しながら子供さんを診ていくということが習慣としてあります。特に3つ目の、いわゆる大人の病気の早期発症というものが、余り一般的になっていないんです。どうしても子供さんの問題を見ると、発達の問題なんだろう、それとも愛着の問題なんだろうという2つの軸で考えることが多いのですが、それだけではなく、もう一つ、いわゆる精神障害の早期発症という側面もこれから重要になってくると考えています。

実際に思春期に社会生活の中でどのような問題が起こるかということを考えてみますと、

家庭内暴力ですとかひきこもり、不登校、いじめや非行といった問題が比較的良好に知られています。特に非行というのは、医学的にも診断概念がございまして、素行症という名前がございます。素行が悪いので素行症ということですがけれども、本日の資料を拝見しますと、行為障害というふうに書いてあるかもしれません。行為障害という言い方もします。あとは女の子に多いんですけれども、摂食障害。それから先ほど申し上げたように、統合失調症や鬱病が早期発症すると、こういった問題が起こりやすいということが特徴かと思います。

一般児童精神科の医療というのは、従来、特に昭和の時代には、精神科というのはなかなか敷居が高いところだという理解があって、悩んでいても本人が自分で行くことは案外少なく、どちらかというと周りが心配して病院に連れていくというようなイメージで捉えられることが多かったんですけれども、さすがに現在は、大人の精神医学を受診する患者さんの圧倒的多数はご自分で受診されます。あの人ちょっと気になるからと周りが連れてくるということは、最近は極めて珍しくなっています。

一方、児童精神科の場合は、やはり子供さんがみずから精神科の病院に行ってみようということを考えることはまずございせん。一般的には家族や教師から見た発達や行動や学業の問題などをきっかけにして病院を受診するということが多くなります。

そうしますと、どうしても児童精神科の領域ですと、周りが困っているといった問題が医療に乗りやすい。本人が困っているという問題が比較的軽く見られやすいということが一つございます。実際のところ、ある程度我々の相談が定着してきますと、本当に困っているのは周りよりもご本人自身だということのほうが多いわけです。ですので、私たちは社会生活の中で、周りが困って受診することの多い子供さんたちだけでも、いかに本人が困っているのかということを引き出すのかということが一番重要な仕事になってくると思います。

さて、そんな中で、特に周りが心配して連れてくることの多い発達障害の筆頭は、ADHDになります。ちょっと宣伝になりますけれども、実は私、今月、発達障害という新書本を書かせていただいたんですけれども、必ずしも障害とは言えないけれども、そういう特徴を持っている人たちがかなりいるということを強調しているんです。それで、このADHDという言葉の最後のDというのが障害に当たる言葉ですので、それをあえて取って、注意欠如多動、英語でいうとADHと、そういう特性の人たちがいて、その中の一部がADHDになるんだと考えるとわかりやすいということなんです。一言で言うとそそっかしい人たちなんです。

子供さんの場合、特に幼児期から小学生ぐらいまでの間は、ちょろちょろ動き回るとか、衝動的に何かいろんなことをやらかしてしまうということが問題になりやすいことがあるんです。ただ、中学生ともなってくると、純粹にADHDの問題で、ただ落ちつきなく動き回るというお子さんは、実は極めて少ないんです。

ここで発達障害を考えると、実は発達障害というのは発達だけを考えるのではなくて、育ち方や経験による影響をものすごく受ける人たちなんです。だから、もともとの原因は生

まれつきかもしれませんが、中学生ともなると、それまでに経験したいろいろなことが加味されているんな色合いを帯びてくる。だから、もともと生まれつきのADHDの人たちというのは、どちらかというと純粹で明るくて陽気な人たちが多いんですけれども、どうしてもしかられたりする経験が増えてきますので、少し警戒心が強くなったり、他の人に対して攻撃性を帯びてきたり、大人を信用しなかったり、そんなことが加わってくる場合があります。

これ、学校の先生方にいつも申し上げていることなんですけれども、ADHDの人たちの最大の特徴は、一言で言うとやればできる人たち。いわゆるできるのに普段やらない人たち。このやればできるのにやらない子供さんを見たときに、親御さんや学校の先生方というのは物すごくいらいらしたり腹を立てたりする。ここが実は一番肝心で、ADHDの方々というのは、普段はやらないんだけど、なぜかやればできる、いわゆる本番に強いタイプ。ところが大人というのは、子供さんに対して何かこつこつ頑張らせたい。このこつこつ頑張るというのだけがとても苦手な方々がADHDだと思うんです。そうすると、こつこつ頑張るのが苦手な人たちに、こつこつ頑張ることを必死でやらせると、そこにエネルギーを使って消耗してしまって、実は本番でそんなに強くなることもある。そうすると、ADHDの人たちの支援の一番重要なポイントというのは、こつこつ頑張らせて本番を弱くしてしまうように育てるのがいいのか、それとも、普段こつこつ頑張ることは一旦諦めて、本番に強いからいいじゃないかというふうに関き直すことを周りが腹をくくるのかという、そういう側面が出てくるわけです。

実際のところ、比較的社会にうまく出られているADHDの人たちというのは、どちらかというと本番に強いという習性を残している人たちなんです。逆に、普段こつこつ頑張って、周りからこつこつ頑張って偉いねと言われているんだけど、本番で失敗しがちな人というのは、どうしても自信を失いやすいわけです。ですので、発達障害の人たちの特性を本当に理解するというのは、彼らの強みをいかに生かして弱みをそんなに表沙汰にしないで済むかという育て方をするわけです。例えば、ADHDの場合は、強みというのは本番に強いこと。弱みというのはこつこつできないこと。であれば、本番には強いけれどもこつこつしなくても目立たなくて済むように、そういう支援の仕方をというのが一つのやり方です。

私は、やればできるから普段からちゃんとやってほしいということを望むのではなくて、いざとなればやればできるんだから、普段そんなに頑張らなくてもいいよということを、文化として浸透させていただくことが学校に求められることではないかと思っているわけです。こういう話を教育委員会ですくするなと思うんですけれども、あえて言わせていただきます。

次ですけれども、次は自閉スペクトラム症です。これも代表的な発達障害の一つです。ちなみに、先ほどのADHDは、アメリカでは人口の14%がADHDと診断されている州があるらしいんです。これは、アメリカのCDCという疾病予防センターのホームページに出ているものです。それに対して、自閉スペクトラム症というのは、アメリカでは2%弱となっ

ています。それに対して我が国の統計を見ますと、ADHDがもっと少ないんですけれども、ADHDが5%も多分診断されていないと思うんです。それに対して、自閉スペクトラム症が人口の5%前後診断されている地域が複数ございます。

我が国でなぜこの自閉スペクトラム症が多くて、ADHDが少ないのかというのは、実のところまだ確定的なデータはないんですけれども、恐らく我が国の文化習慣として、対人関係を重んずるようなところが強いのかもしれません。それに対して、人種的なものかもしれませんが、そんなに落ちつきがない人がたくさんはいないのかもしれません。

この自閉スペクトラム症の基本的な特徴というのは、いわゆる臨機応変の対人関係がうまくいなくて、ちょっと不器用だということと、それから、こだわりが強く自分の興味関心があることを最優先させたいという特徴がどうしても捨てられない人たちなんですけれども、いわゆる物事にはまりやすい人とか、例えばこだわりのある職人さんみたいな人たちというのは、実はこういう特性が多かれ少なかれあるから、むしろ仕事がうまくいくということもあるわけです。

ですので、この自閉スペクトラム症も先ほどのADHDと一緒に、最後のDを取って自閉スペクトラム、ASDではなくASというふうに考えて、そういう特性のある人たちの中の一部が、何らかの理由で生活に支障を来すために自閉スペクトラム症と診断されると理解をしていければと思います。

この自閉スペクトラム症の方々は、幼児期から小学校の前半にかけては、やっぱりかなり対人関係がマイペースで会話がかみ合いませんし、こだわりが物すごく強く、先生方をなかなか困らせる一幕になりがちなんです。家でも親御さんとなかなかうまくコミュニケーションがとれなくて困るということが多いんですけれども、実際のところ、最近は自閉スペクトラム症の対人関係の異常ですとかこだわりをうまく活用した支援法というのが、特別支援教育の領域ではかなり取り入れられていまして、具体的には耳から入る情報よりも目から入る情報のほうが優先するという特性が強いということを生かして、いわゆる視覚情報をたくさん使った教育ということが結構行われるようになっています。

おかげさまで、自閉スペクトラム症のほとんど多くの方は、今の学校教育の中で、特に特別支援教育を利用されている方については、かなり適切な指導を受けていらっしゃるのではないかと思います。ただ、もう一方で、一見自閉スペクトラム症の特徴はそんなに強くないけれども、よくよく見るとそういう特徴を持つ人たちが、いわゆる特別支援教育から漏れているんです。いわゆる一般のクラスの中に入っていて、低学年のうちは比較的うまくやれているかに見えるんですけれども、学年が上がってくるにつれて微妙な対人関係の問題でいじめ被害に遭ったりですとか、それから、微妙な興味の偏りで授業がどうしてもつまらなくて出られなくなったりして不登校になったり、そういった問題が多くなっているということが知られています。

ちょっとここから先は私の仮説なので、コンセンサスがあるものではないんですけれども、

自閉スペクトラムの人というのはこだわりが強いので、自分がやりたいことを最優先したいんです。そんなに気が進まないんだけどやらなければいけないことというのが増えてくると、ちょっとつらくなってくる。一般の人というのは、やるべきことが詰まっていると、まずそれをやって、それから睡眠をとるとか身の回りのことをやるとか、そういったことをある程度こなした後に、残った時間で余暇を過ごしてやりたいことをやるというのが通常の生活で、それをいとも簡単に一般の人はやるんですけれども、自閉スペクトラムの人は、どうもやるべきことが増えてきたときに、やりたいことを削り切れないんです。なので、どうもこれ以上は絶対削れないやりたいことというのがあるんです。それを超えてやるべきことが増えてきたときに、かなりストレスになります。これ以上削れない上にストレスが強くなってくると、ストレスを発散するためにやりたいことをするので、松本でも多いと思いますけれども、自閉スペクトラム症の方の多くが夜更かししてゲームやネット、スマホゲームに没頭するという現象がございます。あれは、日中にストレスが強くなればなるほど、むしろゲームにはまってしまうということが起こり得る悪循環なんです。実際それで昼間の活動に魅力を感じなくなると、休みが多くなってしまって、昼夜逆転になったりすると。こういった現象を、今たくさん大学病院で見えています。

先ほどのADHDですと、いざというときやれるということをいかに生かすかという話だったんですけれども、自閉スペクトラム症の方の場合、やはりこだわりの問題というのは無視できないわけです。彼らのこだわりをいかにうまく活かして生活していくかということを考えていくということが、これから重要になってくるかと思います。

これも学校の先生方にこれを言うのは本当に申し訳ないんですけれども、自閉スペクトラム症の人たちが、心が健康で長く生活できていくためには、やりたいことから順にやって、睡眠をちゃんととって、やるべきことだけでも気が進まないことというのは後回しにするということを実際によくやっていただくということに尽きると思います。これでもなおかつ生きていけるような道筋を考えていくということが実はとても大事で、実は、私はここにやりたいことから順にと言いましたけれども、仕事やりたいことという人だって大勢おられるわけです。つまり、仕事をするときに、君たちはこれを本当にやりたいと思って仕事をしているのかなんて話もしますけれども、やりがいのあることが仕事になっている人というのは幾ら仕事をしてても全くエネルギーを失わない。これは自閉スペクトラム症の人と同じなんです。これは、気が進まないけれども、やらなきゃいけないことがたくさん出てきているというのは簡単にバーンアウトしてしまう。ここをわかっていただくことが大事なかなと思います。だから、彼らのやりがいの持てる仕事、活動をいかにうまくつくっていくのかということが、彼らの社会参加にとっても重要であると思います。

もともと自閉スペクトラムの人たちというのは、こつこつ真面目に頑張れる人たちが意外と多いものですから、学校の活動も彼らの意欲に沿った活動であれば、勉強でも何でも物すごく意欲的に取り組める人たちが多いいんです。ところが、学校でこう決まっているからやり

なさいみたいなことばかりが生活の中に入ってくると、それが自分たちのやりたいことと合致しない場合に、途端に物すごく意欲が下がってきてストレスが強くなっていく特徴があります。そういった意味では自閉スペクトラム症の人たちへの学校での支援というのは、いかに本人の興味をうまく活用した課題を設定できるかということに尽きるかと思います。

幸い特別支援学級というのは、今、そういうことができてきていると思います。ですが、一般のクラスの中にいる自閉スペクトラム症の方々がうまくいかないのは、恐らく通常のカリキュラムの中で彼らの興味と合わないことが出てきたときに、彼らのストレスが物すごく増えてしまうんだらうなと思います。

発達障害への理解は、とにかく発達が一樣でないということに尽きます。もともと先生方にこんなことを言うのは申し訳ないんですけども、カリキュラムが一樣だと多様性に対応し切れないということが当然あるわけです。特に発達障害の方々というのは、発達得意分野とそんなに得意じゃない分野がでこぼこしています。標準化された、一樣に設定されたプログラムですと、どうしてもはみ出てしまったり理解が難しかったり、そういう部分が出てきます。そういったときに、そこに対してどうやって対応するのが最大の課題になります。

先生方、当然ご存じのとおり、ヴィゴツキーの発達の最近接領域というのがあるんですけども、これは、ちょっと教えれば身につけられるようなことをうまく身につけて教育してくださいよという教育の原理です。例えば、今の文部科学省の学習指導要領は、平均的な子供さんがある程度発達の最近接領域に触れるような形でカリキュラムがつけられているので、7割、8割の子供さんにとってはそのプログラムを普通にやってもある程度順調に学んでいけるし、やりがいを持てるんです。ところが発達障害の方々の場合、自分にとっての発達の最近接領域と学校のカリキュラムはしばしばずれてしまうために、どうしても学び損ねてしまうことが増えていると。だから、その発達が若干でこぼこしている人たちのでこぼこに対応した一人一人の発達の最近接領域をどうやって見つけていくのかということが非常に重要なテーマになるかと思います。

なので、基本的には一人一人の子供さんを見て、すぐに伸びそうなことは手伝い、伸びるのに時間がかかりそうなことは後回しにするということが自然にできていれば、一人一人の子供さんが全く問題なく育っていけるわけなんです。けれども、どうしても集団生活をしている中でそれがうまくいかなかったときに、最初にはじかれてしまうのが発達障害の人たちということになるのではないかなと思います。

あともう一つですけども、近年の学歴社会及び少子化社会の中で、全体的に高学歴化をしてきているんです。今や私の見ている方の中でも、知的障害の手帳を持っているんだけど大学は卒業したという方が出てきたりしています。つまり、昔でいう高等教育というのが必ずしも学力が高い人たちだけのものではなくなっている時代に入ってきています。その中で、どうしても親御さんたちが、とにかく勉強していい学校に入れさせたいという気持ちが強くなっていくんです。

ところが、実は発達障害でいいますと、発達障害の学生さんたちがうまく社会に出ていくために、あちこちの大学に発達障害学生の支援室というのができています。信州大学ももちろんあります。そして、信州大学よりもはるかに古い歴史を持つのが東大と京大の学生支援室なんです。つまり学歴が高いからといって、将来絶対安心できるというわけではないわけです。

むしろ私の関わっている方々を見ていますと、学歴が高い低いよりも、もっと本当に教えておかなきゃいけない大事なことというのが別にあるようなんです。それは何かというと、社会に出たときに自分がどこまでできるか、何ができないのかということをおある程度自分で考えて判断する力を養う。それから、自分にとってちょっと荷が重いなと思ったことについて、誰かの援助を求めたり相談をしたりするという、そういう力を身につけることなんです。社会人になったときに、上司から何かを命令されたときに、これはできませんと言えるかどうか。それから、できないときに誰かに相談できるかどうかということは、とても大事なイロハのイだと思うんですけれども、実は我々は、不安定な発達障害の方で、そういう自分がどこまでできるかの判断をする力や、人に相談する力がうまく育っていない方が大勢おられます。これは、やはりできななきゃいけないとか、できて当たり前だという文化の中で育っていると、どうしても自分ができないことがあったときに、それを自分がいけないんじゃないかと思ってしまって、人に相談できなくなるんです。そういったことが積み重なると、発達障害の人たちの場合はなかなか社会にうまく出ていきません。ですので、そういったことをいかにうまく育てるかというのが大事になってくるんです。

次の育て方の問題というのは、発達障害に限らず全ての子ども方に言えることなんですけれども、一人一人の個性に応じた育て方ができるかどうかというのが、今、とても大事な宿題なんだと思いますけれども、それがどうしてもうまくいかないときに、違うタイプの育て方を私は幾つか尊重しております。

ご説明しますけれども、まず1つは、一人一人の特性に応じた育て方というタイプです。これ、私は特性特異的教育タイプというふうに呼んでいますけれども、この育て方というのは、得意なことを伸ばし苦手なことはそんなに無理させなくという育て方です。

それから、困ったときに人に相談することを保障するという育て方で、これがうまくいきますと、非常に社会性のある育ち方ができます。ところが、どうしてもほったらかしになりがちな親御さんもいます。そうすると、情報がちゃんと入ってこないと、子供さんたちというのは見よう見まねで目の前のことを必死でやるような生活になってしまいます。これが一番極端に起こってる状態がネグレクトなんですけれども、いわゆるネグレクトの子供さんというのは、大事な情報を一切入れてもらえず、自分で見よう見まねで目の前のことに対処するという生活を続けることになっていきますので、非常に情緒不安定になりやすいです。

それから、3つ目のタイプが過剰訓練タイプです。いわゆる教育ママみたいな人たちが、殊更に勉強みたいなことを必死で教えたりすることが起こってくると、実は子供さんたちは

気力を失って無関心になりますし、それから、いつに何をやっても叱られるので、人に相談できなくなっちゃうんです。こういった人たちというのが、いわゆる引きこもってしまっている人たちの中の一部を占めていると思っています。

最後が自主成果尊重タイプです。これは、先ほども言った高学歴なんだけれども、大事なことを学び損ねている人たちになります。やはり今、学校というのが、とにかく学力向上を目指すということで偏りがちに、社会的には見えているんです。だけれども、学力が高いからいい社会人になれる保証というのはないわけで、やっぱり何か得意なことがあるのはいいことなんだけれども、その中でも社会人として学ぶべきことというのをきちんと教えていくという必要が出てくるのかなと思います。

さて、残りの時間で、少し発達障害も絡んできますが、特に中学生ぐらいの時期に多い不登校の問題、それからいじめの問題について触れたいと思いますけれども、現状では、不登校は、基本的にはゼロにすることは難しいと思います。もちろん理想的にはなるべくゼロに近づけたいんですけれども、やはり学校というのが、今のようにある程度大人数で、ある程度共通のプログラムを運営していかなくちゃいけない状況ですので、一人一人の子供さんの中に、一部どうしても学校の文化が本人の特徴と合わないという人が出てくる可能性があるんです。そういったときに、この子、この学校の授業の進め方、今の文化だと合わないなと気付いたときに、いかに早く見つけてそこに個別の対応をするかということが求められるんだと思うんです。

そのときに大事になってくるのが、登校渋りという現象が起こるんです。これは、私は常に親御さんと接することが多いものですから、どうしても親御さん側に立つんですけれども、登校渋りをするときによくあるのが、家でとにかく朝学校に行くのを物すごく嫌がる。だけれども、学校に着いてしまったら、にこにこして楽しそうにやっているので大丈夫ですよ。そうすると、どうしても学校の先生方からは、親御さんがちょっとだらしがないから家で送り出せないのではないか、という雰囲気、圧力を感じるわけです。

なんですけれども、私はそういうときに必ず聞くんですけれども、学校が好きなんだったら、家から学校に行くとき、身体を動かすのが面倒くさいとか、ちょっとおっくうだから行き渋っているかもしれないです。もしそういう理由で行き渋っているんだとしたら、学校に着いちゃったら今度は帰るのも渋るはずなんです。つまり、登校渋りしているお子さんがもし帰宅も渋っているのであれば、これは要するに単に楽しいから名残惜しいだけだと思うんです。だけれども、ほとんどの登校渋りの方は、学校に着いちゃったら楽しそうに一見見えますけれども、帰るときは喜んでいる。これを学校の先生方は充実した笑顔とか言っていますけれども、大概の場合はせいせいして帰っている可能性があります。

だから、登校渋りというのは、多くの先生たちがご家庭の問題というふうに考えがちなんだけれども、もう一方でやっぱり学校とご本人の相性がちょっと悪い部分もあるんじゃないかということで、何か本人が学校にそんなに魅力を感じていない要因について、分析をする

必要があるんじゃないかなと思っています。

不登校になったときこそ学校と家庭の連携はとても大事で、やはり学校はちょっとつらくて、家は居心地がいいから不登校になっています。そうすると、どうしても家の居心地が良すぎるんじゃないかなんて思う人がいるんだけれども、やはり自分が居心地よくて安心できる場を確保した上での外での活動ですので、どうしても不登校になったときというのは、家でも親御さんが学校に行かせたいと思って親子関係がぎすぎすするんです。そうではなくて、親子関係をまず修復して、親子関係が安定して、家の中ではのんびりリラックスして過ごせるようにしておいてから、さあ学校どうしようかねというふうに進んでいくので、まず先生方は、いつでもおいでという誘い方はぜひしていただきたいんだけれども、同時に、家庭の中で親子が安心してゆったり過ごしているかどうかということをぜひチェックしていただけたらいいかなと思います。

それから最後にいじめの問題ですけれども、いじめの問題は、基本的にはどんなに仲いい友達同士でも、からかいみたいなことが起こったときに必ずいじめの要素が入ってくるんです。いじめというのは一見同じようなからかい言葉や軽い小競り合いみたいなことの中で、一方が上の立場にあるかというふうに認識しています。一方は、自分は下の立場に立っていると認識して、下の立場に立っていると認識した人が自分はいじめられていると認識したら、これがいじめなんです。なので、いわゆる上下関係とか序列化思考が強い文化の中ではいじめが起きやすいという問題があります。なので、ある意味いじめの問題というのは、社会や世相と絡むようになってくるわけです。いじめが多発する学校というのは、どこか学校の雰囲気全体の中に上下の序列思考みたいなものが強いんです。先生方が無意識のうちに生徒たちを抑圧するような指導の仕方をしているんです。生徒の中で上限関係があるときに、先生がそこに介入せずに放置しているという、そういった問題があるときにやっぱりいじめの問題が起きやすいと思いますので、やはりいじめの問題というのは、区分的には上下関係ではなくて、対等な関係の子供たちの関係づくりをきちんと肯定するということから始まってくるのかなというふうに思います。

そして、近年問題になっているゲームやインターネット、ギャンブル、まあギャンブルは中学生だったらいけませんけれども、いわゆるスマホ等についてもです。これは、よくギャンブル依存とかスマホ依存とかという依存症の概念で考えやすいんですけれども、実は私どもが見ている夜更かししてスマホを触りまくっているような子供さんたちの大半は、依存と言える状態とはちょっと違うんです。むしろ依存というのは、本来は、それは好きで好きでたまらなくて、他のことを一切やりたくないということが本来の依存ですけれども、彼らは他にやることがないのでやむを得ずスマホに手がいく。それが証拠に、学校で本人が楽しみにしている遠足があったりすると、そういう日だけはスマホをさっさと手放して遠足に行くんです。

なので、実はスマホ依存になっている人たちというのは、日中の、彼らの言葉を使うとリ

ア充が足りないわけです。リアルな充実がうまくいっていない。だから、やっぱり彼らのリアルな生活の中でいかに充実した活動を保障するのかということが大事なので、学校の中でも彼らがこういう活動だったら行ってやろうと思えるような活動をぜひ用意していただけたらいいのかなと思います。

最後に、合理的配慮という話をします。

先生方ご存じの合理的配慮ですが、これは合理的配慮の一番大事なポイントは、ご本人や親御さんが合理的配慮を希望するということなんです。気になる子がいるなと思ったときに、気になるからということで学校側は自主的に合理的配慮をするのではなくて、ちゃんと親御さんや生徒さんと話をして、こういう部分については、こういう配慮をすともっと適合ができるということを学校側からも提示していただくのが本来の姿です。もちろん親御さんたちのほうが先に子供さんの問題に気がついて、例えば病院なんかに行って、うちの子は発達障害だと診断されているのでこういう配慮をしてくださいと言われたら、当然やらなきゃいけませんけれども、合理的配慮というのは基本的には親御さん、ご本人と先生方とは話し合って決めて進めていくという契約の概念ですので、そこをぜひ進めていただけるとありがたいと思います。

どうしても発達障害の方々は、興味が偏ったり集中力がなかったりするので、目標を持ちにくかったり、達成感を持ちにくかったりする人たちなんです。これは、目標をうまく持たせる、それから達成感を少しずつでも感じていただく。こういったことが得られる環境だと、意欲が高く、十分に学校に行かれるようになるのかなと思います。特に一般のクラスに入っている発達障害の方々が、この目標や達成感を持てないという状況の中、いかにそこをうまく持っていていただくかということをぜひ考えていただきたいと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

○管理者（菅谷 昭君） 本田先生、ありがとうございました。

先生のお話をこのまま聞いていきたいと思いますが、わかりやすく、また、豊富なお経験をもとにして現場に関するお話しをしていただきましたから、余計我々は納得してお話が入ってきました。今、本田先生は、研究者の立場でもあるということからお話をいただいたんですが、ここで、それでは意見交換に入りたいと思います。進め方といたしまして、まずは各委員の皆さんからそれぞれの立場における現状や、また、課題等についてご発言いただいて、その後で今度は本田先生を交えての意見交換に持っていききたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、7名の方に順次お話をいただきたいと思います。5分ぐらいをめどでお話しただきたいと思っております。

それでは、私のほうから、指名をさせていただきます。

最初に、大森委員さん、お願いいたします。

○教育委員（大森志保君） 本田先生からお話をいただいてから、発達障害について、個々に

より症状や個性が全く異なるということを学びまして、この場で漠然としてあれやこれやというお話をすることよりも、こういうときはこういう対応をとという検討をすることが大事なのではないかなと思ったのが率直な意見です。

また、親の立場としては、この子は障害ですという診断をもらうことよりも、実際に困っている時に手を差し伸べていただくことがありがたいと思います。程度の違いもあるかと思いますが、軽度の場合は、子供が小さければ小さいほど親のほうの受け入れがとても難しいんじゃないかなと感じます。

先ほどのお話の最後のほうにもあったんですけれども、本人と保護者が希望しないと何もできないということだったんですけれども、うちの子は大丈夫とか、うちの子は発達障害に違いないとか、そういうふうに思ってしまう、一くくりにしてしまうことができないのが、とても難しいなと思いました。

例えば年少のときに、言葉の発達が遅れているという指摘をされたお母さんがいまして、話し方の教室に通っていたんですけれども、現在は高校生になって普通におしゃべりもできるし、話も上手になっているお子さんもいまして、健診で指摘されて早期に取り組めたことがよかったのかもしれない。

私の子供も学校からの呼び出しがとても多く、育て方やしつけに問題があるんじゃないかととても悩みました。また、自分が医療機関に勤めていたので、たまたま思春期外来の先生に相談したら、一度連れておいでということで、一応診察室のほうに私と子供と一緒に診ていただいたことがありました。とても長い時間かけてお話を聞いていただいて、歩き方を診ていただいたり、学校のノートを持ってきなさいと言われて、学校のノートを細かく見てもらったりして、その時は大丈夫とも病気とも障害とも言われなく、様子を見ていきましょうという感じだったんですけれども、私も子供も専門家の先生に相談できたということがとても安心することができた経験になりまして、その後、私も子供もそれぞれに自信を持ち、お互いに積極的な活動していくきっかけにもなりました。

育てにくい子供というのが確かにいると思うんですけれども、でも、本当はすごく大変で逃げ出したくなるぐらい子育てが大変で、どのお母さんも頑張っているんだ、私だけじゃないから頑張らなくてはと思ってしまうんですけれども、大変なときは大変ですと何か言えるような話ができる場があればいいかなと思います。

早期に発見して対応していくと成長を見込めたケースがあるということで、やり直しができないのが残念だなと自分も反省するばかりなんです、自己肯定感というのが劣化してしまうと、それをまた持ち歩いていくのがもっと大変じゃないかなというのは実感しています。

また、事前にいただいた本田先生の資料の中に、そう気づいた日から、対応や支援を見直せばよいということが書いてあるのを読みまして、保護者の私にとっては、ああ今日からでもいいんだと、とても心にしみる一文でした。

また、特別支援学級の保護者から、学校のほうに何点か要望がありまして、よい機会です

のでここでお伝えしていきたいと思います。

鉢盛中学校の現状というわけではないんですが、支援学級の生徒数がそのときにより変動するので、少ないときはとても手厚く、多くなると行き届いていないというのを感じるということでした。

また、学年がばらばらだったりすると勉強も進み方も異なるため、さらに難しくなっていくのを感じているということで、保護者の求める対応としては、教員でなくても人手があったらありがたいと言っていました。

また、教員により個人差があり、支援の必要な生徒に対しての対応が異なることに違和感があり、特別支援学級に対する知識を学んでほしいという希望があるようです。

また、具体的な話にはなってしまうのですが、娘の担任だった先生が心の病で療養休暇をとって、復帰されたときに支援学級を担当しました。その先生はとても優しいし、一人一人の生徒に向かう姿勢はとても支援学級に向いていると思うんですけども、支援学級への配置が教員の職場復帰へのリハビリ的な人事になっていると思われてしまいそうな発見もありました。他の学校の保護者からも似たような話も聞きました。義務教育であるので公平に指導を受けられる環境や、専門知識のある教員の配置を皆さんは望まれています。

まだお時間いただいて大丈夫ですか。

支援学級生徒の普通学級への参加についてなんですけれども、昼食だけ一緒に食べるとか、行事に参加するなどの形でクラスに配属されているんですけども、その方法について、今年、実際に体育祭のクラスの対抗の多種目リレーのメンバーを決めるときに、トラブルがありました。本人にやりたいものを選んでもらって、その選んだものが百人一首の上の句と下の句を選ぶというかなり難しいものを選んでしまって、当日それが原因でリレーの大差がついてしまい、結果が4位になってしまったそうです。本人が参加することが大切だし参加できてよかったねと思っている子がほとんどですけども、クラスの中には百人一首の結果のせいで4位だったという声が上がったことから、たまたまそれが本人に聞こえてしまい、とても傷ついてしまったということがありました。それは、別のものにできないのかと、私も自分の子供に聞いたんです。百人一首の上の句と下の句なんてすごく難しいじゃないですか。じゃんけんしたり、スキップしたり、豆をつまんだり、いろんなメニューがあるんですよね、先生。

- 鉢盛中学校学校長（藤田克彦君） はい。
- 教育委員（大森志保君） いろんなメニューがあるのに、なぜ百人一首にしてしまったのか、別のものにできなかったのかと私も子供に聞いたんですけども、そうしたら、本人がやりたいと言ったから、それは難しいから簡単なじゃんけんにしなよとはとても言えなかったと。では、どんな対応をすればよかったのかなと、それは今でもわからないでいます。
- 管理者（菅谷 昭君） ぼちぼちいいですか。

続きは時間があったらお願いします。今、各論の話で一個ずつ違うものですから、後ほど

もし時間があればということをお願いしたいと思います。すみません。

それでは、次に平林さん、お願いいたします。

○教育委員（平林昌廣君） よろしく申し上げます。

本田先生からのお話を子供たちの具体的な姿や自分の不足やら、親としての自分のことやらを思い浮かべながら聞いていました。今、私は地域に関わっているんですけども、そういう地域のボランティアとして、あるいは地域の行政体として考えていかなきゃいけない、あるいはいつも持っていなきゃいけない基本的なスタンスのヒントを教えていただいて、本当に目から鱗でした。ここはちょっと反省しなきゃということがいっぱいなんですけれども、3つばかり先生に教えていただきたいことがあります。

1つは教育相談に村で関わってくれている方々とよく話をすることがあるんです。そこで現場で関わってくれている人たちの話の中に、発達障害のある子供さん本人への対応での戸惑いというようなことを幾つかお聞きするんですけども、同時に、親御さんたちの対応の仕方について、非常に課題を抱えている親御さんもいらっしゃるなという、子供さんとそれから親御さんと両方に関わっているいろいろな支援をしなきゃいけないようなご家庭やケースも増えている中で、なかなか対応が難しいというようなお話をよく聞くんですけども、そんなところでも、今、ヒントもいただきましたけれども、さらにもう少し具体的にサジェスチョンをいただければありがたいなというのが一つです。

それから、今、学校教育の中では、よくインクルーシブ教育というようなことが言われていて、ユニバーサルデザインの話も鉢盛中学校さんのほうで急いで進めていただいているんですけども、地域で子供と関わっていると、よく考えてみれば、常にインクルーシブなんです。こんなことで子供たちの、いわゆるギャング集団の中での、ボランティアも含めて地域の我々のそういう子供たちとの関わり方について戸惑うことが多いんです。

例えば、水曜日の放課後、大体職員会が設定されている裏で、小学校の子供たちと山形っ子タイムなんていって、学校管理下であるんですけども、先生たちとの接触がないというところで、いわゆる評価主体はいないところで、地域と子供たちとの関わりの時間があります。そこで、すぐ寄ってくる子供たちとか、あるいはちょっと荒っぽい言葉遣いや行動を示す子供たちと関わっていると、いろいろ背景に見えてくるんですけども、我々は高齢者のボランティアが多いものですから、今の子供たちや親御さん等のことを考えながら、どのように対応したらいいのかなと戸惑う事例が非常に増えています。そのようなところでの、医療や福祉と教育との関わり合いの中で、地域の我々の関わり方というようなことがどうもわからないところです。そんなことで、本田先生のご講演も何人かで一度聞きに行ったこともあるんですけども、また具体的なお話を聞かせていただければありがたいということが2つ目です。

それからもう一つは、義務教育が終わってから、いわゆる思春期の後半といいですか、高校生や成人された方の、いわゆるこういうことで悩まれた子供さんたちの進路面での関わり

方もどのように行政として考えていけばいいのかというようなことも教えていただければありがたいと思います。

以上、意見といたしますが、先生に教えていただきたいことばかりですが。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

また後ほど、先生、ディスカッションでよろしくお願いします。ありがとうございました。

それでは次に、根橋さん、お願いいたします。

○教育長職務代理者（根橋範男君） 私、小学校の現状と対応の話をさせていただきます。

山形小学校の状況を申し上げますと、今、発達障害名がついている児童が45人おりまして、全児童に占める割合は9%程度になります。このうち特別支援学級に在籍している児童は23人で、全児童に占める割合は4.8%くらいになります。一方、通常学級に在籍している発達障害名のある児童数は22人で、発達障害の可能性があり、特別な支援が必要だというふうに思われている通常学級に在籍する児童数は30人になっています。両方合わせて52人の児童が通常学級に在籍しているわけですが、通常学級在籍児童数に占める全体の中での割合は11.4%で、1学級当たり通常学級の中で3人ほどが困難を抱えている状況というような、現状になっております。

このような背景を受けて、就学の判断に上がってくるお子さんというが増加の傾向にあります。こうした状況を踏まえて、では、どのような対応をしているかというのを4点ほど申し上げます。

1点目としましては、早期発見・早期対応として、年に16回の巡回相談を行い、園児や児童の発達課題について相談支援を行っています。

2点目としましては、小学校に村費の相談員を配置して児童の悩みを聞き、集団に入れない児童の支援や担任への支援等を行っています。

3点目としましては、今年度より教育委員会と中央部局の子育て支援課を統合して、子育てと教育の一貫した連携を一層図ることとしました。

4点目になりますけれども、特性を持つ子供たちの捉えと支援の仕方について、保育士と小学校職員合同の研修会を年に数回行っております。

次に、課題について申し上げます。

特性を抱えた子供たちの中学校卒業後の成長や支援の様子が全くわからないものですから、社会との関わりや今後必要となる支援の内容というのが見えない状況です。幼児期から保育園、小学校、中学校、高校等から社会人へと支援をつないでいく取り組みというのが、今後大切になるかなというふうに考えています。

以上でございます。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございました。

それでは次に、二茅委員さん、お願いします。

○教育委員（二茅芳郎君） よろしくをお願いします。

今の根橋委員さんとほとんど内容的には同じなんですけど、小学校、保育園の関係でちょっとお話をしたいと思います。母集団が小さいものですから今のような数字にはならないんですけども、いわゆる支援が必要だと思われるお子さんの数です。これは、いわゆる特別支援学級に入級していない子供でありますけれども、担任の見た目での数で、約1割強が通常学級の中で支援が必要ではないかというふうに捉えられている子供たちです。

この子供たちに対してどのような支援をしていくのかということが大きな課題でありますけれども、7校ネットと呼んでいる中信地区7校の特別支援学校と連携をして、OJTで教員が学んでいるというのも、おかげさまで2年目に入っています。まだまだ具体的な成果は出てきていないんですが、そういう経験を通して、通常学級でどういう支援をしていくのかということがある程度見えてくるといいなと思っています。

それから2つ目です。保育園の話になりますが、できれば未満児のうちは親御さんの温もりの中で育ててほしいんですが、現状は、社会的な状況から言うと難しいです。未満児保育がだんだん増えてきています。ですので、今年も年度途中に保育士を雇わなければいけない状況にもなりました。このことがどういうふうに影響していくのかわかりませんが、いわゆる愛着の育ちに多少なりとも影響があるのかなと感じる場面があります。親子関係が希薄になってきていると言われていますが、小さな村ですけれども、いわゆるDVのようなこともあります。本田先生のお話を聞いていると、何となく、そんなものかなと思う場面が幾つかありました。

それから、3つ目です。小学校で全く問題として上がらない子供が、中学校へ行って突然不登校になるということが毎年あります。この辺も調べていくといろいろな原因が見えてくるんですが、今の家庭に問題がないか当然見ますし、発達障害の関係も出てきますし、聞いていていてなるほどと思いました。今後、さまざまな学びの場を考えなきゃいけないんですけども、部分支援、いわゆる特別支援学級だけが学びの場ではないと思いますので、やはりそのような対応ができればいいなと思っています。

いずれにしても、どのように接して、どういう対応をしたらいいのか、ということは研修をして学んでいかないとうまく対応できないのかなと思います。学校や保育園だけではなくて、行政も当然関わりを持つわけですから、学ばなければいけないと感じています。

以上です。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

それではここで、鉢盛中学校の藤田校長先生、お願いいたします。

○鉢盛中学校校長（藤田克彦君） それでは、鉢盛中学校の現状、それから課題について何点か触れさせていただきます。

お手元の資料に現状とありますが、まず1の（1）の表、一部修正をお願いいたします。

（1）、いわゆるLDの在籍数、通常学級2年生に1名おりますので、合計ゼロではなくて1名です。申し訳ございませんが、訂正をお願いします。

このところから見ていただきますとおわかりのように、現在3学年含めて通常学級在籍生で、何らかの診断・判定を受けている生徒は10名。それから、担任、その他教員の中を含めて、判定は受けていないけれども特別な支援が必要ではないかと日常の観察からそのように思われる生徒が30名、合計40名というのが現状でございます。約9%というふうに思いますけれども、そうする中で、1クラス、1年生は多いので三十三、四人。2、3年生は30人くらいの教室の中でそのような子供が学習、生活を行っているわけですが、やはり進めていく中で、苦しさ、厳しさがいろいろな形で現れてくる生徒もいます。

それで、一つは登校を渋ってしまうということが顕著に出てきます。そうしたときに本人、保護者含めて状況を相談しながら、本当に今の学びの場が本人にとって一番いいのかというところと一緒に確認させていただいております。そうする中で、学校ばかりではなく、生徒によってはそれまでの支援会議やケース会議の様子から、松本養護学校の教育相談の先生や朝日村の保健師さんや山形村の保健師さん、地域の方等々を含めて進める中で、本年度の年度途中に3名が通常学級から相談通級という形で特別支援学級に学びの場を移して、本当に元気に生き生きと生活できるようになったというケースもございます。

そういうことで、本田先生のお話もあったわけですが、やはり当事者である本人を含めて、複数の視点から見た子供にとってよりよいものをという、本人の意向を踏まえてやることの大切さということはあるわけなんです。反面、いわゆる合意形成が非常に難しいケースもございます。例えば、特別支援学級在籍の判定を受けた生徒もいます。保護者は学ばせたい。しかし、本人が友達とずっといたい。見ると苦しいんです。苦しいんですけれども、その学びというのは共有できない。また逆のケースもあります。本人は苦しくて特別支援学級に移りたいんだけど、保護者が認めないというケースもあり、そのようなところで本人を中心に置きながら、一緒に就学支援、相談を進めていくということの必要性和難しさというものを、実際のものを通してやっています。

また、大森委員さんの話の中にもありましたが、専門的な方に相談できたことで本当に安心したということもあり、そうさせてあげたいなということもあるんですが、そういった部分もなかなか受け入れ難く、伝え難いということもあり、本当に子供のためにやっていくためにはどうしていったらいいかと悩むケースもあり、よりよいアプローチの仕方であれば教えていただければありがたいと思います。

もう一つ共通しているのは、こんなに複数あれば、やはり教師の力量というものが本当に大きく、一緒に授業をしながらも個別にやっていけるような課題設定をする必要があります。そのベースには生徒理解ということがもう絶対欠かせないので、本校も11月の職員研修で、松南病院の宮坂先生に来ていただいて具体的に相談したことがあるわけですが、本当にそういうものの必要性を切に感じております。

以上でございます。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

それでは最後に、赤羽教育長からお願いします。

- 教育長（赤羽郁夫君） まず、本田先生の講演をお聞きして、先生がお話の中で指摘されているように、日本の教育そのものがどうしても一定、一律一斉というんですか、ある標準カリキュラムのもとで行われてきています。みんなが同じようによりよく育ってほしいということで、私も教員でしたので、私たち教員も、それから保護者の皆さんも、それに向けてみんながよかれと思って取り組んできました。そういう意味では、世界的に見れば日本の教育は、それなりの成果は上げてきたと思いますが、しかし、私も教育現場にいるときに、平成10年に入るくらいから、何か子供たちの様子がおかしいなという思いをしました。

そして、いわゆる手のかかる子というのが非常に増えてきて、平成19年くらいから、いわゆる特別支援教育支援員の配置も始まり、いよいよ人手を充てて、それに対する支援をしていこうという取り組みが始まってきたわけです。本当に今、多様性に応じた配慮や支援が求められているということで、特に私は本田先生が12のところに書かれているとおり、近年の発達心理学から子供の発達はかなり多様性があることがわかってきたという、これは私も実際に教員をしていて本当にそれを実感してきました。本当に一人一人多様性があると。

もう一つは、いろんな領域が同時に均等に発達するわけではないということです。これは、私が自分自身の育ちを振り返ってみると、私自身も小学生の頃の通知表には、6年間ずっと落ちつきがないと書かれていました。いまだに落ちつきがないところがあるわけですがそれでも。そういうふうに、同時に、均等に、みんな同じように発達するわけではないということを本当に大事なことだということを改めて思いました。

そういう前提のもとに、今、教育委員さん方のご発言をお聞きして、具体的な取り組みもたくさん出ました。子供や親や教員はどう支援をしていったらいいかというのと同時に、1つ目として、医療を含めた支援体制。例えば、この鉢盛は1市2村で構成されていますので、1市2村の横の連携と同時に、何人かの委員さんから、やはり保育園から中学卒業、高校も見通して、縦系列の発達支援や相談支援の体制をどのようにとっていったらいいかというお話も出ましたので、その辺のあり方についても、今の共通の話題になったかなと思います。また本田先生からも、特に学校でやるべきことは、教師の力量の話も出ましたが、行政としてもやるべきことについてご助言をいただけたらありがたいなと思いました。

以上です。

- 管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

今日ここで結論を出す場ではないものですから、各委員さんそれぞれの立場から、悩まれていること、あるいは教育委員ならではの課題等をお話しいただきました。本田先生からもいろんなご助言をいただきたいというお話もありましたので、全体を通しまして、今度は本田先生からいろいろお聞きしたいと思います。

- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 平林先生からいただいた3点を先にお話し……。
- 管理者（菅谷 昭君） ええ、どうぞ。

○信州大学医学部教授（本田秀夫君） 先ほど、親御さんとの連携が大事だと言ったと思いますが、もう一方で親御さんにもかなりいろんなバックグラウンドの方がおられるというお話だったと思います。例えば発達障害は、もともと親御さんの育て方が悪くてそうになっているわけではないんですけれども、ただ、先ほど私が先生方から見ると、何だこれと思うようなことだけを今日は抽出して持ってきた理由というのは、発達障害のお子さんを育てるときは、通常我々が考えている常識とは全く正反対のアプローチが重要なときがあるんです。そうすると、やっぱり子供さんの特性を親御さんもしっかり認識して、こういう育て方は無理そうだから、やっぱりこういう道がいいんじゃないかという頭の切り替えをしなきゃいけないことが求められるわけですが、親御さんの中には、それはとてもストレスだという方がおられるわけです。

そうすると、我々は家族支援をするとき、あくまで子供さんを中心にはしたいものの、子供さんを中心にするのと親御さんにとって負担になっちゃうという部分も考えていかなきゃいけないので、どんな形のスクラムが組めるのかということ、これも一人一人の親御さんに対して考えていかなければいけません。そうしたときに、例えば親御さん自身も何らかの発達障害的な特性を持っていたり、心の病を持っていたり、あとは、何といっても親御さん自身が子供さんにどうしてもかっとなってしまい、やや虐待めいたような対応をされてしまったりするような親御さんもおられるわけです。そうすると、子供さんがこうだからこうしてくださいねということを親御さんに言えば言うほど、親御さんのストレスが高くなってしまいますから、そういうときには、むしろ親御さんがとても頑張っていることを労って、親御さんの悩みだとか親御さんがしんどいと思っている部分に共感して、子供さんのことよりもまず親御さんに安心して学校に通わせよう、行かせようという、送り出そうという気持ちを持っていただくということを最優先しなきゃいけない状況というのが多々あると思うんです。

ところがその場合、ある意味、協調関係というよりは、親御さんも含めた家族をケアするという形になりますから、どこまで学校でやるのかというのはとても難しくなってきますので、やっぱり家族全体を支えるということに関しては、特に自治体の、例えば松本市であればこども部になるんですか。もしくは福祉系になるのかもですし、村の場合には、福祉や保健師さんといった家族に対して関わってくれるような人たちにも入ってもらった上で、子供さんにどこまで求めるかということを考えることが必要になってくるかなと思います。

それから、インクルーシブ教育のことですけれども、私、またこれを言っているのかどうかちょっとあれなんですけれども、通常、一般のカリキュラムというのは、大体統計的に5%が外れていたという理屈がもし成り立つとすると、95%の方が同じクラスで授業が受けられるのが本当のユニバーサルデザインだと思うんです。よくユニバーサルデザイン教育なんていう話がありますが、今の学校のシステムは、例えばIQ110ぐらいの子供さんが大体ちょうどいいような進み方になっている印象を私も持っています。なぜ、IQ110と

言ったかという、本来はIQ100が真ん中のはずなんです。真ん中のお子さんよりも若干学力が高いくらいのお子さんを基準に当てたカリキュラムを標準にしちゃうと、それだけちょっと難しいなと感じる方が増えてくると思うんです。だから、やっぱりある程度全てのお子さんがそれなりに過ごしやすいカリキュラムを考えるんだとすると、下位5%ぐらいのところのお子さんがそれなりにわかるような授業を組むということも必要になってくるんだと思うんですけれども、それがなかなか難しいです。

だから、今言った、いわゆるインクルーシブ教育の中で、みんなが同じカリキュラム、プラットフォームといいますか、そういったものの中で授業ができるというのはかなり限界があるんだと思います。そういった意味では、理想的には、学校というのはある程度決まったカリキュラムを淡々と進める役割の先生と、それから、一人一人のこぼこに対してきめ細かい対応ができる特別支援専任の先生が付くことがあると思うんだけれども、本当は標準的にそういうチームの授業というのがこれからは必要になってくるのかなと思います。なので、標準的な授業と個別の対応と、1人の先生に任せるとするのは、やっぱりもう限界が来ているのかなと思っています。本当は、予算も含めて文部科学省が考えるべきことなんでしょうけれども。やっぱり今それぞれの先生方が、昔に比べても物すごく大きな負担を持っている時代なんだと認識して、どうすべきかを今後考えていくということなのかなと思います。

あと、3つ目何でしたか。ごめんなさい。

- 教育委員（平林昌廣君） 義務教育終わってからの。
- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） そうですね。

発達障害に限らず、障害のある方々の就労というのは、いわゆる障害者就労の関連法律というのがございまして、一般的に勤労就労というのは、普通の就職ができる方と、それから、それがうまくいかない場合にさまざまな形で、これは原則として障害者手帳を持っているんな支援を受けることが前提なんですけれども、障害者手帳を持っている人たち向けの就労支援、コースというのがございます。

常識的に考えると、身体障害の方や知的障害の方は、ほとんどの方がそういう手帳を取得して就労しているんですけれども、難しいのが精神障害と発達障害なんです。この方々は、ある程度の学歴があったりしますと、どうしても普通に就職できるのが当たり前だろうとご本人も思ってしまうものですから、なかなか手帳を使って就労するということに敷居が高いという方もおいでになります。ただ、現実問題としては、先ほど私がやりたいことからやるという話をしましたけれども、どうしても発達障害の人たちが抵抗感なくやれることが、仕事ではなくて消費活動になってしまったりするような方も当然おられるわけです。それこそゲームにはまってしまっている人の場合、いわゆるゲームをつくるようなことに興味を持てれば仕事につけそうな感じがしますけれども、実は今、ゲーム業界というのは人がいっぱいいますので、よっぽどのことがなければゲーム業界で仕事をやっていくというのは難しいわけです。

そうすると、発達障害の方々の中には、能力的には高いものがあつたとしても、何らかの形で福祉的な制度を利用しながら就労支援を受けるようなことが必要になってくる方というのが、一定割合必ずいると思って頑張っていく必要があると思います。

そうすると恐らく、例えば中度の知的障害、重度の知的障害の方に頑張らせて、何とか一般的な学力を保障して、高校を出させて会社に就職させようというふうには、一般的には余り考えないことです。それと同じで、発達障害の方も何か能力はありそうなものだから、もっと頑張れば自立して仕事を見つけるかもしれないと先生方も思って、どうしても頑張らせたくないんだけど、そこはやっぱり頑張らせてもうまくいかない部分が残る可能性がある人たちだという認識をどこかで持っていて、そのときできることを淡々とやっていただいて、最終的に仕事につくところでその人が持っている能力で仕事が見つかれば仕事をすればいいし、難しい場合には福祉の手続きをとるということを自然にやれるということを考えざるを得ないと思うんです。仕事が見つかるか見つからないかというのは運もありますし、時代の流れというのもございますので、僕が精神科医だからということもありますけれども、やはり心を病んでしまうと、そのことだけで社会に出てくるのが物すごくハードルが高くなりますから、せめて発達障害の方々の場合、発達障害の特性は残つたとしても、気持ちだけは前向きに、健康に社会に出ていただけると、多少福祉のお世話にはなることがあるにしても、生きていく道は見つかるんじゃないかなと思います。

- 管理者（菅谷 昭君） 根橋委員さん、何か先生に伺うこと、聞きたいこと、いいですか。
- 教育長職務代理者（根橋範男君） ええ、今、先生がおっしゃつたとおりだと思います。
- 管理者（菅谷 昭君） そうですか。

じゃ、二茅委員さん、何かありますか。

- 教育委員（二茅芳郎君） はい。
- 管理者（菅谷 昭君） 改めて先生にお聞きしたいということはあるですか。
- 教育委員（二茅芳郎君） 聞いていてなるほどと思うことばかりです。本当に難しいですよ。特に親御さんとどういうふうにつながっていくのかということが大変難しいなと思って、どこまでお互い歩み寄れるかというところを大事にしていかないと、難しいです。そんなことをつくづく感じました。
- 管理者（菅谷 昭君） 大森委員さん、どうですか。いろいろさっきのお話、火種もあつたんですけれども。
- 教育委員（大森志保君） クラスの中にいるちょっと困つた仲間に対して、どのように接していけばいいのかというのをお聞きしたいです。やっぱりクラスの中でも困っているんですけども、このようにしたらいいんじゃないかというのがあれば教えていただきたいです。
- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） その困り方にもよるんですけれども、そうですね、中学生で発達障害の特性がある人の中で、みんなが迷惑しているのにそれに気づかず強く出てしまつたり、問題発言や問題行動を繰り返すことがあるとすると、それは発達障害だけで

はなくて、やっぱり情緒的にちょっといらいらしやすくなっていたり、他の環境因子的な要素も加わっている可能性が高いんです。なので、生徒さん同士での解決だと難しいことを覚えておいてください。

私も時々あるんですけども、やっぱり中学生ともなると、先生方がなるべく当事者本人同士の話し合いで自主的に解決させようという対応をとられるんですけども、やっぱり大人が介入しないところで子供さんだけで話し合いでやっても大体決裂するので、やっぱりある程度先生が交通整理をする形をとっていく必要があるのかなと思います。

あともう一つは、他の生徒さんたちが気になるお子さんが来たときに、そのお子さんだけを集中的に注意するといじめの雰囲気になります。また、親御さんがある程度発達障害のことを理解していて、少し配慮してくれと言うと、今度はその人をえこひいきするみたいな雰囲気になることがあるんです。それはそれで、また何であいつだけという話になるんです。

いずれにしても全体と言えるのは、他の生徒さんたちもストレスが高いということなんです。人間というのは、一般的には自分がある程度満たされていると、他の人の問題については多少優しくなれるんですけども、自分もつらいと感じていると、何であいつだけ、俺たちは我慢しているのにという話になるです。だから、そういう雰囲気が出てきたときに、他の生徒さんたちがある程度自分たちが満たされるような状況を意識的につくるということが必要です。その生徒さんがその火種になっている場合はなかなか難しいんですけども、やっぱりそれ以外のところで生徒さんたちがリラックスして、ストレスなく生活できる環境をつくっていただくということも大事じゃないかなと思います。

- 教育委員（大森志保君） だんだんひどくなっているような気がします。そういうものなんですか。
- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 大体売り言葉に買い言葉のような感じになってくると、エスカレートはしやすいです。
- 管理者（菅谷 昭君） そういう環境づくりというのを学校の教員たちにできるかどうかということで、校長先生、何かお話をいただければと思います。
- 鉢盛中学校学校長（藤田克彦君） 今、イメージできるような状況があるんですけども、私も見たり聞いたりする中で、やっぱり言葉のかけ方、同じ言葉を言うにも、その最初の言葉が物すごい大切だと思います。特にそういう特徴、特性を持っている子供たちには大きいなということ。1回そういうふうになってしまうと聞く耳を持たなくなってしまうのがあり、本当に先ほど二茅教育長さんからもお話がありましたけれども、やっぱりどう対応するか、どういう言葉がけをするか、同じことをするにもそういうところが物すごく大事ななことだということは感じています。

本当にこういうような話を聞いたりすると、もっと自分たちの児童観や生徒観を変えていけないといけないなと思いながら、日々の言葉がけ一つにしても、とても大事なことだなと感じています。

- 教育長職務代理者（根橋範男君） 本田先生、教えてください。

例えば小学校 1 学年で、30人ぐらいの学級規模の中に 4 人ぐらいそれぞれ特性の異なる子供たちが在籍するときに、学級担任 1 人でどう対応するというのはどんなふうにしたらいいいわけですか。

- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 余り大っぴらに言えないかもしれませんが、やっぱりそのクラスの構成メンバーに合わせて授業を変えていくしかないと思います。

私は大阪出身なんですけれども、私が小学校で学んだころの大阪というのは物すごく緩い世界で、私、6 年間の小学校の生活の中で、教科書を最後まで終えた年はないんです。年によっては上下の教科書の上しか終わらなくて、この下は一体どうなるんだろうと子供心に心配したことがあった年があるんですけれども、恐らく先生が子供たちの様子を見ながらそこを加減されていたんだと思うんです。

ところが今というのはそういう時代じゃなくなってきて、もう最後はラストスパートをかけてでも、なんとか教科書をやらなきゃいけないみたいな、そういうノルマみたいなものが強い気がするんです。そこは恐らく手際のいい先生は、やったふりをしながらうまいことやっていらっしゃるような部分もあって、先生の中でやらなきゃいけないノルマをこなすことに精一杯なのではなくて、やっぱり生徒さんたちの反応を見ながら、ここはもう軽く飛ばそうとか、何かそういう授業をこなす流れや、生徒さんたちが勉強してある程度わかった気になればいいやというぐらいの授業も大事かもしれません。

あと、クラス内での活動も、やっぱり個性的な人が複数いる場合に、一致団結して同じことを目指すということを表に出さないほうがいいと思うんです。例えば、大縄跳びをやる学校がありますけれども、運動が苦手なお子さんが 1 人入ると、目標が達成できないと子がいじめられるんです。クラスの構成メンバーを見て、このクラスだったらこれならやれるという全体活動があればやればいいですけれども、みんなもやっているから一律にやらなきゃというふうにやると、クラスによってはそこで軋轢が生じると思うので、その構成メンバーを考えてできそうなことをやるといった柔軟な対応が必要になってくると思います。

- 管理者（菅谷 昭君） その辺は、教育長、どうですか。

- 教育長（赤羽郁夫君） 例えば中学校でも小学校でも学校訪問をすると、必ず教室に学級目標が書いてあります。それは必ずメモすることになっているんです。このクラスは何を目指すのか。そうすると、一致団結に近いような目標も結構あるんです。かといえば、全く今度は十人十色みたいな、本当にそれぞれがそれぞれ輝けばいいというのがありますので、このクラスはきっとこういうことを目指しているんだなということはいつも感じるようにしています。やはり私は今の学習指導要領の中で、最も可能性があって、私たちが大事にしたいのは総合的な学習と、小学校ではプラス生活科。これが最も自由度の高い時間ですので、それをいかに活用して、そして核にしながら教科学習を広げていくかというところが、やっぱり多様な子供たちに応じた教育活動を保障して、子供たち一人ひとりが自分の目標ややりがいを

感じられるような時間になると思います。そこを今、総合的な学習を中学にもということで、指導主事を中心にして学校の年間計画を作って助言等をしています。そこがやっぱり、この中では充実させていくということがすごく大事なことはないかなというふうに思います。

でないと、やればできる、できないみたいな構図にはまってしまって、冒頭で本田先生がおっしゃったように、私も教員をやっているときに、12月の個人懇談会というのがもう終わったんですけども、本当にほとんどの保護者は、先生、うちの子はやればできるんですけどという内容の懇談でした。でも、普段はやらなくて困るんです、先生、何とか言ってやってくださいよという構図。そのうち何とかかなりますねと聞いていたんですけども、現状の中で、私たちは今の教育活動の中で何が一番子供たちの可能性を広げられるかということも、今日の本田先生のお話とあわせて考えていくことが必要ということを改めて思いました。

- 管理者（菅谷 昭君） 本田先生、先ほど複合型のシステム、普通の学級で普通の子供を教えて、他の先生が発達の特性を持った子供たちを教えるといったダブルでいったほうがいいんじゃないかとおっしゃったわけですね。まさにそう思うわけであります。海外に対して、日本はこういうところ遅れているじゃないですか。だから、そういうシステムを早急に作らないといけないと思います。先生も日本のトップレベルですし、いまの日本でクローズアップされて、全国的なものではないかとも思いますが、その辺は、先生いかがでしょう。
- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 実は、海外は、恐らく日本ほど一般のクラスの中での授業の構造が一律化されていないんじゃないかなと思うんです。ある程度個別性が保障されている一般クラスと、かなり個別性が保障されている特別支援クラスとの両立でやっているという印象があります。

あと、北欧がインクルーシブ教育にかなり偏るんですけども、北欧型の教育というのは、一般のお子さんも含めて、ほとんどみんなばらばらな進度でやりますから、一律に進めるのではなくて、ここまで到達したら次のステップにいくみたいなやり方です。だから、小学校、中学校で留年する人も全然構わないというような構造になっています。だから、ある程度個別性もあるんだと思います。

日本の場合、文部科学省は、やはりどうしても特別支援教育をやっている部署と、そうでない部署の縦割りの壁があるので、厳しいというふうには聞いていますけれども、そこが何とかなくなってほしいなと思っています。

- 管理者（菅谷 昭君） ぜひそういうふうな形になるといいと思います。どうしてもやっぱり、集団生活で一律にやらなきゃいけないというような風潮がありますよね。ですからそこが、先生方、苦労されているんじゃないかと思います。

それともう一つ、最後にあれですけども、教員の皆さんへの研修をやられていても、日本全体が今、子供の心を扱う専門医もそんなに多くないような状況じゃないかと思うんですが、この辺の見通しはどうなんですかね。

- 信州大学医学部教授（本田秀夫君） 見通しですね。長野県は結構頑張っているんですけど

ども。

おかげさまで、我々の教室でいえば、大体うちを卒業して5年程度の小児科や精神科の先生方に対する講座をやっているんですが、今、登録しているのは70名いるんです。県内の小児科の先生が64名と、精神科の先生が10名ぐらいいます。ですので、医者の中ではこういう領域に関心を持っている先生方は、今、かなり増えているかなと思っていますけれども、ただ、今こういうカリキュラムをやっているのは全国でもまだ五、六件しかないので、まだまだです。

できればメンタルヘルスとか発達障害に対する考え方といったものを、学校の先生方のカリキュラムの中で、特別支援教育を専攻する以外の先生方にもかなりの時間を割いてやるべきじゃないかとは思いますが、医者も少ないものですから、今は難しいですね。

- 管理者（菅谷 昭君） 先生方も働き方改革と言われており、本当に大変だと思うんですが、時間をつくってこういうことも必要だと思います。

時間も迫ってはいるんですけども、もしあれだったらどうぞ。

- 教育長（赤羽郁夫君） 一言いいですか。
- 管理者（菅谷 昭君） どうぞ。
- 教育長（赤羽郁夫君） 私自身もそうでしたけれども、今、本田先生がおっしゃいましたように、やっぱり職員研修では、例えばADHDですとか、いわゆるその障害そのものを理解するという研修を受けてきたわけですけども、先生の本の122ページ、123ページにあるこの強弱と重複の表のように、やはり子供を丸ごと捉えるというんですか、そういう視点が我々教員の研修の中には欠けていた部分であって、そういう視点でまさにまた職員研修や子供とどう向き合うか考えていくことが必要なんだと思いました。

個々の教科の指導力ということとは別に、まさに子供とどう向き合うか。それを通して、また保護者とどういうふうに向き合っていくかというところを、もう一回、しっかりやっていくことが、子供の幸せにつながっていくのかなということを、改めて先生の本を読ませていただいて教えていただいたと思います。

本当に今日はありがとうございました。

- 管理者（菅谷 昭君） 先生、ありがとうございました。

先生、一つだけ。

発達障害という言葉は余りよくないんじゃないかなと思うんです。多分、僕も誤解していました。先生の本を読んでみて、ああ、そういうことなんだなと思いました。発達障害という言葉は、僕はまさにそういう発達の障害だと思ったんです。そうではないんですね。

だから、発達には、いろんなバリエーションがあって、可能性があって、それはそれでいいんだと、特性があるんだと。そこで生活の中で問題が起こったときに、初めてそれが発達障害だということなんですね。普通の人とは、発達障害というと、まさに発達の障害と思っちゃうものですから、これは先生、名称をいいものに変えてください。そう思いますよ。これは、

自分で間違っただけだと思ひまして。

いづれにしても、今日はいろんなことを学ばせてもらったわけでございますけれども、これから本田教授には何かとまたお世話になりますし、先生のご活躍をご祈念申し上げます、また今日は教育委員も本当にありがとうございました。

これでもって閉じさせていただきます。

- 事務局次長（小林伸一君）　ありがとうございました。それでは大変お疲れさまでございました。

当組合の総合教育会議ですけれども、定例の会議は年１回でございますので、本日で終わりになりますが、生徒の生命または身体に被害が生ずるなど、緊急の場合は招集がございますので、あらかじめご承知おきいただきたいと思います。

また、本日の結果につきましては、先ほどお話がありましたとおり、公開ということで議事録を公表するとともに、２月５日の定例会においても、議員の皆様へ報告していく予定としておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、平成30年度第１回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を終了いたします。

ありがとうございました。

閉会宣言

平成３０年度第１回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉じる旨宣言した。

<午後４時３０分閉会>

会議録調製職員　事務局主事　深澤　亮平